

第8回 外国語コンテスト

英語部門

2002年度外国語コンテストの英語部門は、11月27日（水曜日）午後4時40分から第1研修室において実施されました。審査員に本学名誉教授池裕先生、本学教授ジョン・ハミルトン先生をお迎えし、本学助教授多田哲也先生の司会・進行のもと、15人の参加者たちが熱演を繰り広げました。十分な準備・練習をしてコンテストに臨まれていたのが良くわかる、意気込みの感じられる発表が多く、レベルの高い競争となりました。

コンテストでの発表内容には選択の幅があり、審査員も聴衆の人たちも、いろいろな内容の英語に興味深く聞き入っていたようです。発表内容としては15人中13人の人が、指定された6種類の課題から1つを選択しました。選択された課題の内容は、ゴア元副大統領の演説の一部、短い楽しい物語、テクノロジーについての論説文、ワールドカップに関する新聞記事など、多岐に渡りました。参加者はそれぞれに課題文を読み込み、筆者の気持ちを理解し、壇上から説得力を持って語りかけていました。指定された課題以外では、自分で作ったスピーチ、自分で選んだテキストから暗誦という選択肢を選んだ人が、それぞれ一人ずつであり、内容・気持ちがよく伝わる発表でした。

途中、休憩が入り、ハミルトン先生から大きなケーキと紅茶が出され、なごやかなティータイムのひとつとなりました。その後、発表の続きがあり、そして審査員の先生からの講評と結果発表となりました。

審査の結果、1位は自作のスピーチでアメリカでのホームステイの経験をもとにホストファミリーについて語った松元香保里さんでした。ホストファミリーと過ごした時間を、ホストファミリーへの

感謝の気持ちを織り込みながら、正確な発音とすぐれたイントネーションで発表され、聴衆をひきつけていたのは見事でした。2位はゴア元副大統領の演説の一部を暗誦された白鷺さん。審査員の先生はゴア元副大統領の気持ちがよく伝わる感動的な英語と、褒められていました。3位の木村恵さんは、テクノロジーについての論説文を暗誦され、長い単語の多い難解な部分もある文でしたが、原文の難解さを感じさせず、審査員の先生も強い印象の残った発表のひとつとおっしゃっていました。残念ながら入賞にいたらなかった人の中には僅差の人も多く、また、今後の健闘を楽しみにしています。これからも機会をみつけて、英語に親しみ、英語を発話し、そしてそこから学ぶ面白さを感じてください。

(小坂 敦子)

ドイツ語部門

2002年度名古屋語学教育研究室主催第8回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2002年11月29日（金曜日）の午後4:40分より名古屋校舎中央教室棟203教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回の課題は、基準が明確になるようにひとつのテキストに絞るということで、ドイツ語の統一テキスト“Gabi und Frank”から、“Wir beschreiben ein Bild”というタイトルのFrankfurt a.M.を紹介する文章を選びました。文章は平易なものですが固有名詞が多いのと、記述文ですので会話や物語文と比べて少し単調になりがちかもしれませんが、テキストに写真があり具体的なイメージはつかみやすいものと思われます。

また今回は審査員に、ネイティブ・スピーカー

である法学部客員助教授であるツォウベク先生に加わっていただき、より正確な審査になりました。審査方法は、ツォウベク先生と私（島田）の二人でおこない、表現力と発音・アクセントの合計点で審査しました。

参加者は、申し込みが10人、そのうち9名が本選に臨みました。テキストはすでに一年次の授業で学習した内容ということで、発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、さらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。これらすべて練習の成果を明らかにうかがうことのできるものでした。

非常に接戦となりましたが結果は、第一位（優勝）島敬雄君（01J1399）、第二位榎谷太一君（01J1312）、第三位石川雅英君（01J1142）となりました。

ドイツ語の履修者自体が決して多くはないため、参加者の数も他の言語に比べると多いものではありません。この点は反省点として、次回はより多くの参加者が集まるように工夫したいと思います。しかし法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげでこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。最後になりましたが、審査員を引き受けていただいただけでなく学生の練習を熱心にしていただいたツォウベク先生に改めてお礼を申し上げます。

（島田 了）

フランス語部門

第8回外国語コンテスト・フランス語部門は、2002年11月25日、15名の学生が参加して開催された。今回もまた、残念ながら前年までと比べて参加学生数が減少している。参加学生は1人の3年生を除き、全員が2年生であったが、その3年生の学生が前年度に次いで今回も1位となった。参加者の60%が法学部の学生であり、残りが経営学部の学生であった。

コンテストの課題は、ペローの童話『赤頭巾』の一部を朗読するというものであった。前年度のテキストと比べれば、今回のテキストは相対的に易しいと思われる。それほど難しい発音はなく、同じ言い回しが何度も繰り返されるからである。1回目（予選）は6名の優秀者を簡単に選び出すことができた。

2回目（決戦）はもっと難しかった。準備なしにテキストを読まなければならなかったからである。この2回目のテキストは、アダモのシャンソン『サン・トワ・マミー』の歌詞であった。特に難しかった点は、発音と、朗読のスムーズさに欠けること（すなわち、ためらいのために朗読がたどたどしくなること）にあった。この決戦でのジャッジは明らかに難しかった。しかしながら、教員間で相談の結果、入賞者を次のように決定した。

1位：肥田晴司（00M3304）

2位：植村 舞（01J1311）

3位：木本克良（01J1028）

（ラッセン）

中国語部門

中国語コンテストは、2002年11月21日（木）の13時30分より209教室で行われました。今年は「法・営部門」が先行し、32名の学生が挑戦しました。課題文の朗読ですが、2年生以上は中国の大学生活などを紹介する内容で、1年生は「私の一日」を紹介する内容でした。出場者たちはベス

トを尽くして、正しく中国語を読もうと努力しました。例年とちがい、車道校舎で学ぶ法学部2部の学生が7名も出場し、「今回こそ第1位から第3位までの賞を独占したい」と、意欲満々でした。それに対して、名古屋校舎の学生もまた「絶対に負けたくない」と対抗しました。熱戦の結果、第2位と第3位は法学部2部の学生が獲得しましたが、第1位は名古屋校舎の三井啓史さんが獲得しました。「どうなるかなあー」と、私たち審査員もドキドキして落ち着きませんでした。

続いて「現中部門」が行われました。昨年より出場者は大幅に増え、25名でした。「現地プログラム」が第2セメスターから第3セメスターに移行した関係で、1年生(現2年生)の出場者は21名もいて、その熱気で会場の雰囲気は一段と盛り上がり、活気で満ち溢れていました。今年の課題文の暗唱は「桃太郎」の冒頭の部分でした。中には「おじいさん」と「おばあさん」の対話もあり、出場者たちはみごとに読み分け、プロのような語りでした。お世辞ではなく、どなたも上手で、優劣がつけにくく、審査の先生がたはみなさん頭をかかえていらっしやいました。ただ、その中で中国人の審査員をも感心させたのは鈴木志織さんの語りでした。声調(中国語のリズム)の正しさ、上手な間の置き方、おじいさんとおばあさんの声色、終始笑顔で語る表情など、ほんとうに文句なしの、完璧なものでした。第2位と第3位は男子学生が獲得しました。これは最近では珍しい(?)ことと言えるでしょう。一方、自由部門の参加者は3名で、最後まで暗誦できた1年生の小栗愛香さんが第1位を獲得しました。

審査の結果は次の通りです。

<法・経営部門>

- | | | |
|-----|----------|-------|
| 第1位 | 01J1107 | 三井 啓史 |
| 第2位 | 01SJ1002 | 原田 大輔 |
| 第3位 | 01SJ1103 | 武田 浩靖 |

<現中課題部門>

- | | | |
|-----|---------|-------|
| 第1位 | 02C8038 | 鈴木 志織 |
| 第2位 | 02C8013 | 鈴木 啓道 |

- | | | |
|-----|---------|-------|
| 第3位 | 02C8096 | 久野 晴仁 |
|-----|---------|-------|
- <現中自由部門>

- | | | |
|-----|---------|---------|
| 第1位 | 02C8150 | 小栗 愛香 |
| | | (中川 裕三) |
| | | (鄭 高咏) |

韓国・朝鮮語部門

第8回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」本選は'02.11.21木、開催された。今回は初めて「歌」(사랑해、サランヘ、愛しています)を課題とした。

参加者は20名。課題曲「サランヘ」は、日本のカラオケのどこでも歌える。学生諸君が卒業して社会人になったあとも、「韓国・朝鮮語」を勉強した証として、会社の同僚などとカラオケに行った際、自由に歌える韓国の歌が一曲ぐらいあってほしいという願いもあった。

審査員は、陶山信男名誉教授と常石、それに実質的には韓国・朝鮮語がネイティブである留学生、金 成哲君のアドバイスをもらった。

今回も車道校舎から2名参加。その一人、崔奇先さんは60歳を優に超えておられる貴婦人。もちろん、「外国語コンテスト」の最年長者、「新記録!」である。本コンテストは今後さらに発展し、歴史を重ねていくであろうが、果たしてこの記録はいつ破られるのであろうか。

審査の結果、入賞者は以下ようになった。

- | | |
|----|----------------|
| 1位 | 宮代和代 (01M3376) |
| | 井上友美 (01M3395) |
| 1位 | 金沢洋介 (01M3005) |
| | 尾和克洋 (01M3454) |
| 3位 | 木村 恵 (00M3405) |

(常石希望)

日本語部門

第8回外国語コンテスト「日本語部門」は、211教室に於いて、11月21日木曜日11時30分から2時間にわたって行われました。法学部、経営学部、現代中国学部の外国人留学生の1、2年生15名が、自分の身近な出来事から学んだ日本の実態についてスピーチしました。「にんにく」「私が感じた日本」「桜の国の道」「お互いについての関心」「日本の外食産業」「私のお母さん」「2002年6月くれたもの」「日本の若者」など多種多様な角度からのスピーチは、異国の人でなければ決して気づかない内容ばかりで、どれも興味深く、これまで学習した日本語を駆使して思いの丈を伝えようとする一人一人の学生の真摯な姿は、聞いている者の心に深く訴えるものでした。審査の結果は次の通りです。

- 1位 02C8222 干 莉莉 「私のお母さん」
 2位 02M3520 白 宇 「私が感じた日本」
 3位 01C8220 羅 忠逸 「お互いについての関心」
 (山本雅子)

この後に1位と2位の学生のスピーチを掲載します。読んでみてください。

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 私の日本のお母さん
 現代中国学部1年生 宇 莉莉

二年前の10月18日。ちょうど私の誕生日の日に初めて日本にきました。誕生日の日に日本に来たのは偶然でした。しかし私の心の中にはずっとこれは私の新生という特別な意味の暗示じゃないかなという考えがありました。それで自分の心の中にこういう考えがあるので日本へ来て、何があっても前向きにがんばろうと私は心の中で決めました。自分を超えたいと思いました。日本語の勉強

から始まった日本での留学生活が私には特に別の意味がありました。それは私が私の日本のお母さんに会ったということです。

日本語の勉強のために日本にきて三ヶ月後私はアルバイトをしました。あの頃の私は日本語をたった三ヶ月しか勉強していなかったのであまり話せませんでした。話をきいてわかってもうまく答えられませんでした。店は小さくてお客さんも少ない。いつも私とお母さん二人だけで働いていました。しかし日本語が下手な私にとってはなかなか働きにくいと感じました。仕事がよくできるようになるために私は小さい紙で仕事用語を書いてポケットの中に入れて仕事の時、時々紙をみながら話しました。店が暇なので時々私が学校で勉強した新しい言葉も仕事用語と全然関係がないのも紙に書いて店に持っていきました。ある日店長としての彼女にみられてしまいました。その日店がすごく暇でした。九時すぎてもまだ誰もきませんでした。友達からよくきいていたことがあります。それは“暇な時は店の人がこわいよ。よくおこるよ”ということでした。私は首にされるかなととても心配になりました。自分が日本語を話せないし仕事の態度もまじめではない。ときと彼女は考えるだろうと思いました。しかし意外なことに彼女はその紙を見ても私をおこらなかつたのです。その上“意味がわかる？”と私にききました。“わからないならいってね、教えてあげるよ”と言われました。“日本語はむずかしいでしょ？本を持ってきたの？みせてくれる？私も勉強を助けてあげられるかもしれないね？”その日から私は毎日仕事に行く時、本やプリントなど色々な資料をもって店で勉強をしました。彼女はできるだけたくさん教えてくれました。いつからか彼女を店長と呼ばなくてお母さんと呼んでいました。私自身もしらないうちのことでした。彼女のおかげでその年、私は日本語能力試験一級に合格しました。その日お祝いのために二人でパーティーをしました。その日私は始めて彼女の前で泣きました。「あなたはがんばってたよ。これはうれしいことだよ。泣かないでこれからまたがんばって大学を受けるま

でがんばらなければならないよ。お母さんも嬉しいよ」あの時私は何も言えませんでした。しかし、彼女の笑顔を深く覚えています。彼女は私が大学を受ける前に私と永遠に離れました。大学の合格の通知をもらった日、私は前彼女と一緒に働いた店の前に行きました。しかし彼女の姿はどこにも見えませんでした。

彼女と一緒にいる間、日本語の勉強だけではなくて人間の価値観、世界観なども学びました。彼女の私への影響は本当に大きかった。

私は日本に来る前テレビや新聞や友人の話から日本の社会に対する認識をもっていました。両国の歴史が原因で中国人は日本の社会にとけ込むことができないとか、日本人と親友にはなれないとかいろいろをききました。しかし彼女との出会いは私に人間と人間の関係は国を超えるということを教えてくれました。“歴史は歴史、現実 is 現実”これは私が日本に来た二年間での個人的な新しい認識です。日本の社会にとけ込むことができないということはありません。これからまた日本人とたくさんいい出会いをしていこうと思います。

お母さんに対する私の気持ちはあの歌がよく表すと思います。

さよなら 大好きな人
 くやしいとても かなしいとても
 もう、かえってこない
 それでも私の大好きな人
 何も忘れられない 何も捨て切れない
 ずっとずっとずっと 大好きな人

第2位 私が感じた日本 経営学部1年生 白 宇

私は日本に来てもう2年になりました。この2年の日本の生活で私が感じた日本について皆さんに話したいと思います。

私は2000年10月に京都に着いて留学生活が始ま

りました。秋の京都が本当に素晴らしいでした。私の国には、冬の風まだ強いのに京都もう暖かいでした。最初の印象は、きれいな環境、新鮮な空気、緑の山、ピカピカな車。この優しい環境の中にいるので、外国にきていた不安が全く感じず、将来の留学生活にも自信が持っていました。

大体三ヶ月後、生活のためアルバイト探しが始まりました。一つ一つ真剣に面接したのに、一つ一つに断れました。原因はただ一つ、外国人だから。希望が潰されたとともに、心の中に日本のきれいな印象も潰れました。間違いのない、日本はきれいな国、希望がある国、でも第一なのは、日本は日本人の国。その時、私はこう思いました。友達のお陰で、私は引越し会社に入りました。これで、私は初めて日本の社会の中に入りました。毎日寝ないほど頑張っていた日本人の姿を見て、日本は強くなる理由が分かりました。中国人は駄目と言われないように私も彼らと一緒に毎日5時間しか寝なく、5キロ痩せて一ヶ月ぐらい働いていました。お金を稼いだ同時に、尊敬ももらいました。でも、お正月が終わって会社が暇になって、私もクビになりました。

日本人と一緒にいるうちに、嫌な人がいましたけど、もちろん友達もできました。前のバイト先で、筒井という人と友達になりました。一人の留学生活が淋しくてつまらないでした。でも、筒井さんと知り合ってから、いつも彼の部屋にいて、ビールを飲みながら喋って、笑って、とても楽しいでした。いつの間にか、日本語もうまくなりました。私は昔からバスケットボールが大好きでした。でも、日本に来てからバスケットボールの番組が見られないでした。これを知っていた彼は、NBAの試合のビデオを撮ってくれ、僕の部屋と一緒に見ました。嬉しくて感動しました。二人の間に深い友情ができたと思いました時、あることが起きました。私は大学を合格しましたので、引越しをしなければなりません。でも、荷物が多くて、引越し会社に頼みましたらとても高い。この時、彼は自分の車を出して手伝ってくれました。感謝の気持ちを伝えたいと思う時、彼に

金が要求されました。必要の経費だけではなく、また2万円要求されました。私はとても失望しました。友達だから手伝ってくれるじゃないか？やっぱり友情より金のほうが大事だと思いました。でも二人はここまでではない。今でも連絡しています。これも日本人の考え方だと思いました。友情は友情、金は金。また勉強になりました。

これは、私は日本で遭って、代表的なことであります。日本は社会が進んでおり、安定です。人は勤勉であり、開放的です。でも、日本はもう一つ違う顔を持っています。外国の影響を受けているのに、外国人を排除します。日本人は礼儀に正しいのに、人情に薄い。この全く違う二つの顔はまさしく日本の魅力であります。これは、私の個人的な考えであります。正しいか分かりませんが、皆さんに聞いていただいて、ありがとうございました。

03公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会主催・
愛知大学語学教育研究室共催

<2003年度後期>

場所：ナオリ会館

(461-0002 名古屋市東区代官町27-5。052-935-6011)
(地下鉄桜通線「車道」下車、1番出口より徒歩7分：
市バス52系統[栄～新守山]・121系統[栄～砂田橋
經由上飯田]「水筒先」停留所下車徒歩3分)

時間：午後2時半～4時半

聴講無料

10月4日(土)

「言語学という思想 ソシユールとサビア」

高橋 秀雄(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

11月8日(土)

「看板広告における経路探索の方法」

片岡 邦好(愛知大学法学部助教授)

12月6日(土)

「文法と文脈 談話情報が動機づける統語構造」

須田 淳一(愛知大学短期大学部助教授)

2004年1月10日(土)

「ドイツ語と英語の並列関係について」

トーマス・M・グロース(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

編集後記

今回は特集を設定していないが、中国とフランスに関する記事が二編ずつ、韓国と英国が一編ずつの計六編、それもアジア三編とヨーロッパ三編となり、バランスが良くなった。

春学期もあとは定期試験を残すのみである。約二カ月に及ぶ夏期休暇中に、外国語から遠去かっていると、折角の春学期中の学習が水泡に帰すこととなる。できれば外国語のインプット(読むことと聞くこと)は毎日続けよう。語学は才能ではなく、単に持続力である。

(M.T./S.A.)